

## 女性市民のスポーツ活動の実施頻度別活動状況とニーズに関する研究

○佐藤馨（中京大学大学院） 田原淳子 守能信次（中京大学）  
 スポーツ活動 実施頻度 女性 ニーズ

### 1. 研究の目的

市民がより積極的にスポーツ・レクリエーションに活動に取り組めるような環境づくりをしていくためには、市民のスポーツ活動の実態及びニーズ等を把握することが必要である。特に女性の場合、スポーツ活動を実施したいと望みながら、現実には実施できないでいる人々が多いことに着目し、積極的に実施している人々との間の比較によって、それぞれの特徴を明確にすることが重要になると思われる。

本研究では特に女性を対象として、スポーツ活動の実施頻度グループごとに、その特徴を明らかにすることを目的とするものである。

### 2. 研究方法

愛知県豊田市に在住する20歳以上の男女2,000名を無作為に抽出し、郵送法によるアンケート調査を行った。調査期間は、平成3年9月15日から同年10月15日までである。回収数は1,130部（回収率56.5%）であり、そのうち女性のみ620部を今回の分析対象とした。

また、本研究では、実施頻度の基準として、過去一年間において「週1回以上」スポーツ活動を実施している人を「高頻度実施群」、「月1～3回」程度のスポーツ活動を実施している人を「低頻度実施群」とし、「年数回」および「していない」と回答した人を「非実施群」と定めた、この3グループ間で諸条件の比較を行った。

### 3. 結果と考察

調査対象のうち、高頻度実施群は全体の22.4%を占め、低頻度実施群は10.8%であった。一方、非実施群は、66.8%であり、スポーツ活動の実施率が低かった。

#### 1) 年齢との関係

実施頻度を年齢との関係からみると、高頻度実施群では30歳代（28.1%）～40歳代（24.5%）が最も多いのに対し、低頻度実施群では20歳代（44.8%）が中心であった。また、非実施群では年齢的特徴は見られず、どの年代を通じても同程度の割合であった。このことから、市民のスポーツ活動は、30歳代～40歳代でよく実施されており、高齢になるに従って、実施率が下がる傾向にあることがわかる。

#### 2) スポーツに関する好みとの関係

高頻度実施群の8割以上が「スポーツを見るのもするの好き」と回答しているのに対し、非実施群では、40.6%が「スポーツを見るのは好きだが、するのは好きではない」と回答している。また、実施頻度に関わらず「スポーツを見るのは好きではない」と回答した人はわずか6.6%にすぎず、スポーツ実施頻度の低い人でもスポーツを見ることは嫌いではないという結果が得られた。

#### 3) スポーツの希望頻度との関係

現在のスポーツ活動の実施頻度と今後希望する実施頻度（希望頻度）との関係で

は、すべての実施群で、希望頻度が実際の実施頻度よりもワンランク上に位置する傾向が見られた。つまり、高頻度実施群では「週2～3回」程度の実施を望む人が49.3%と最も多く、次に「週1回」（41.3%）程度の実施を望む人が多かった。低頻度実施群では「週1回」程度の実施を望む人が62.7%と最も多く、次に「月1～3回」（19.4%）程度の実施を望む人が多かった。非実施群では「月1～3回」（29.3%）程度の実施を望む人が多く、次に「週一回」（27.3%）の実施を望む人が多いという結果が得られた。

#### 4) クラブ（サークル）所属経験との関係

スポーツのクラブ所属経験と実施頻度との関係を見ると、高頻度実施群では「現在入っている」（60.7%）と回答した人が最も多く、低頻度実施群では過去に「入ったことがある」（53.7%）と回答した人が最も多かった。また、非実施群では「入ったことがない」（63.3%）と回答した人が最も多く、クラブ所属の経験が実施頻度に影響を及ぼしていることは明らかである。しかし、その一方で、非実施群においても、クラブ所属の経験を持つ人（「入っていたことがある」）が35.8%を占める半面、低頻度実施群においてはクラブ所属の経験を持たない人（「入ったことがない」）が34.3%あり、スポーツの実施にあたって、クラブ所属経験が必ずしも実施と非実施を二分する条件となっていない。クラブ所属経験の有無にかかわらず、スポーツ活動の実施を促進することは可能であると認められる。

#### 5) 重視条件との関係

スポーツ活動を実施する際に重視する条件では、どの実施群も「気軽に使える施設や広場」と回答した人が最も多く、次に多かったのが「仲間やクラブがあること」であった。しかし、それぞれの条件に着目するすると、仲間やクラブといった人間的条件を重視する人が高頻度実施群（61.4%）および低頻度実施群（72.3%）で6割以上に達したのに対し、非実施群では49.7%であった。逆に、非実施群では同じ人間的条件ながら「指導者や世話役」を重視すると回答した人が27.6%あり、高頻度実施群（17.4%）や低頻度実施群（15.4%）と比較して10%程度も高かった。このことは、非実施群ではスポーツ活動を実施する際に、まず受け皿がしっかりしている点を重要視する傾向にあることが明らかになった。

#### 6) スポーツ活動の実施率と希望率との関係

実施するスポーツと実施を希望するスポーツとの関係を見るため、実施率および希望率のそれぞれにおいて上位から6種目を選んでプロットしたのが図1である。

ボーリングの実施率はどのグループでも高く、また、実施率が希望率を常に下回っている。これは、ボーリングが非常に身近で、実施可能なレク・スポーツとして定着していることを示す。ボーリングと逆の性格を有するものが恐らくゴルフである。女性全体での実施率は15%に満たないが、希望率は25%を越え、特に高頻度実施群では22.4%と、実施率の倍以上の値を示している。

高頻度実施群の特徴は、インディアカ、バレーボールといったコミュニティ・スポーツ的な種目の実施率が高いこと、および、それらについては、希望率が実施率を上回らないことである。非実施群では、図上にプロットされた大半の種目が対角線の上に位置する。これは、非実施群が全くスポーツ実施を希望していないわけで

はなく、適切な機会が与えられれば実施につながることを意味している。

#### 4. 結論

市民が過去一年間に実施したスポーツ活動について実施頻度別に分類し、その特徴を分析すると、スポーツ活動をほとんど実施しなかった非実施群が6割を占めた。しかしながらスポーツの好みに関しては、「スポーツを見るのもするのも好きではない」という全否定的な人は全体のわずか6%程度に過ぎず、スポーツ活動への欲求は少なくない。注目されるのは、実際の実施頻度と希望する頻度とのずれがそれほど大きくなり、ワンランク上の頻度を望む傾向にあることである。そこには自分の置かれている現状をふまえ、可能な範囲でスポーツを生活に取り入れようとする姿勢がうかがえる。このワンランク上の活動頻度を実現し、市民のスポーツ活動を推進していくためには、施設などの環境整備に加えて、非実施群にみられる特徴として指導者や世話役、スポーツ教室や行事などの受け皿に対するニーズが高いことなどにも着目する必要があるだろう。

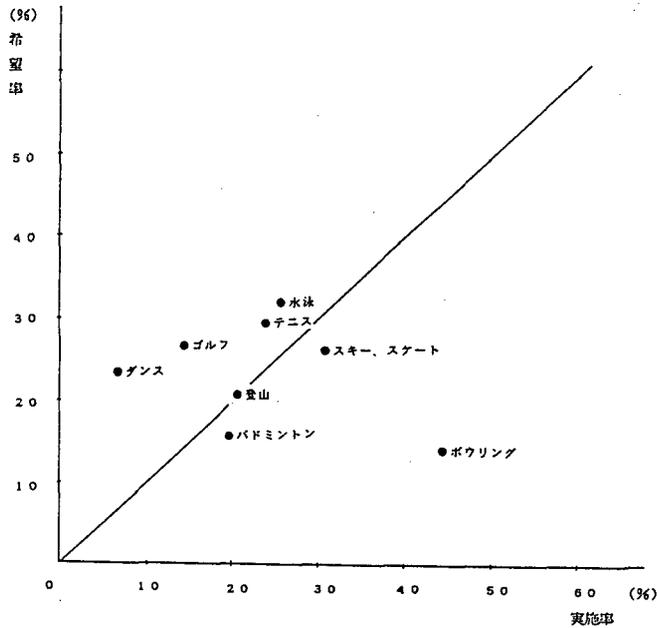


図1. スポーツ活動の実施率及び希望率

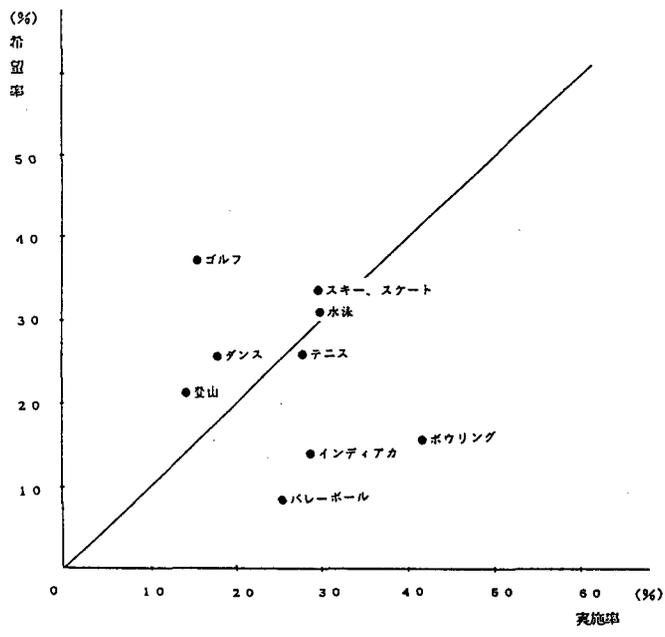


図 2. 高頻度実施群における実施率及び希望率

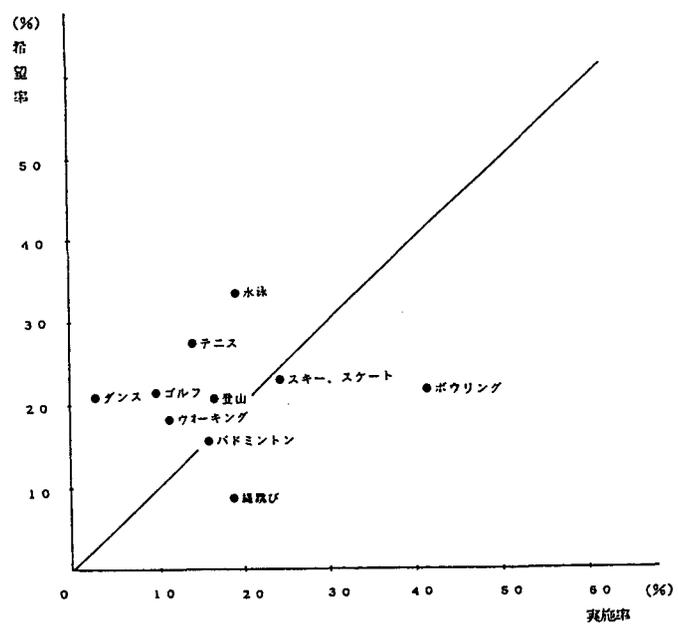


図 3. 低頻度実施群における実施率及び希望率